

ともすみ21

第1巻 第4号

発行日 2025年10月15日

機関誌「共生社会研究」再刊へ

「共生社会」とわたしたちの 思いについて

- 私たちの研究会では、「共生社会」を「多様な背景をもつ人々が尊厳をもって生きることができる公正な社会」と位置づけています。
- その実現には、構造的に存在する不平等の可視化や抑圧と搾取に立ち向かうトランスナショナルな社会的連帯のための理論の構築が不可欠です。
- そうした社会を変革していく力を作り出していくために「共生社会研究」を進めていきます。

目次:

機関誌の再刊記念イベント、来年初頭に実施へ

活動報告1 NPOこどもソーシャルワーク ONE TEAM 2

活動報告2 「がんばろう！つばさネットワーク」法人化 3

私の研究・活動 堅田利明 4

11月の定例交流会 査読者と投稿者が学びあう査読 4

共生社会研究分野では、2004年の創刊以来、「共生社会研究」という紀要を発行してきました。この研究誌は、2020年を最後に発行が停止されていました。しかし、研究会として、会員らの研究成果の発表機会を設ける必要があると考え、来春、ウェブジャーナルを発行する予定で準備を進めています。

そのため、「編集規定」を決定し、現在、投稿論文の審査を行うための査読者とジャーナルに掲載する論文の募集を行っています。それぞれの募集の概要は、以下の通りですが、詳細はウェブサイトをご覧ください。なお、「共生社会研究」は「紀要」と呼んでいましたが、ウェブ版に変更することにともない、「機関誌」に変更しました。

これは、学術研究だけでなく、実践的な活動に基づく研究も積極的に掲載していきたいという研究会の考えを反映したためです。この趣旨をお汲み取りの上、実務家の方々からの積極的な投稿も期待しています。

査読者の募集

大阪市立大学共生社会研究会では、機関誌『共生社会研究』の発行に向けて、査読者を募集しています。本研究会は、人々の多様なあり方を尊重し、対等な関係の実現をめざす共生社会の構築に向けて、理論と実践の両面から課題と方法を探る活動を展開しています。

機関誌は、こうした活動の一環として、会員による研究成果を広く共有し、学術的・実践的な対話を促進することを目的としています。査読者の皆様には、研究の質の向上と、建設的なフィードバックを通じた知的交流の担い手としてご協力をお願いします。

■募集対象分野

教育、社会学、環境政策、公共政策、法律、ジェンダー・福祉・地域づくりなど、共生社会の実現やNPOの事業や運営の向上に関わる分野。

■査読者の資格

以下のいずれかに該当する方を募集します。

- ・大学・研究機関に所属する研究者
- ・共生社会やNPOの実務経験を有し、これらの領

域の実践的知見を有する方

応募の締め切りは、10月31日です。

「投稿規定」と「査読者募集案内」の詳細は、以下をご覧ください。

URL: <https://coexisting1.wixsite.com/academy/webジャーナル>

なお、査読に当たり、投稿者と査読者が学びあう「対話的・建設的な姿勢」をお持ちの方歓迎します。また、査読未経験の方には、査読の心得や手法についてのセッションを提供します。その一環として、11月25日の定例交流会で「査読者と投稿者が学び合う査読をどう進めるか？」をテーマにした、セッションを行います。詳細は、本紙のP.4をご覧ください。

投稿論文の募集

投稿論文は、本研究会の目的に沿った共生社会やNPO関連論文であって、以下の4種類に分類されます。投稿時に、いずれに該当するのか、投稿者は編集委員会に通知してください。

1. 論考(20,000字以内): オリジナリティが高く、学術的価値が期待される論文
2. 研究報告(16,000字以内): 実証的かつ実務的な課題を扱った論文
3. 研究ノート(12,000字以内): 研究途上ではあるが、論考に準じ、一定の研究成果を提示した論文
4. 活動報告(10,000字以内): 先駆的な実践活動などを紹介する論文

なお、論文の投稿は随時行うことができます。ただし、今回は再刊号になるため、一定数の論文をまとめて掲載するため、今年12月末を提出期限とさせていただきます。

詳細は、「編集規定」の「3. 執筆規定」をご覧ください。また、お問い合わせは、以下までお願いします。

〈共生社会研究会編集委員会〉

Email: coexisting.academy@gmail.com

NPO活動を通じて共生社会の実現へ！

研究会の設立の母体だった大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野は、「NPO活動を通じて共生社会の実現を目指す」ことをミッションに掲げていました。目指すところは共生社会、その実現に向けてNPO活動をとらえていくという認識です。この理念を反映して、分野に入学した院生の中には、NPOに関わっていた人が少なくありませんでした。また、在学中あるいは修了後、NPO活動を始めた人もいます。今回は、そうしたNPOの立ち上げに関わったお二人の修了生から、設立の動機や背景、現在そして今後の活動計画などについて、報告していただきました。ご一読いただき、共生社会の創造につなげるNPO活動を進める一翼を担うための参考にしていただければ幸いです。

2025年10月15日

大阪市立大学共生社会研究会 会長 柏木宏



こどもがこどもとして暮らせる社会へ

～NPOこどもソーシャルワークONE TEAMの活動～

特定非営利活動法人 こどもソーシャルワークONE TEAMは、「こどもたち一人ひとりが人間として尊重され、尊厳あるライフコースを送れる社会を構築してゆくために」との思いで、有志のスクールソーシャルワーカーらで立ち上げた任意団体が前身となっています。ONE TEAMでは、より広くこども、若者、家庭のサポートを行うため、彼らのサポーターである個人、団体を対象とした研修会や講演、調査研究を実施しています。また困難を抱えるこども等への相談援助や心理カウンセリング、ソーシャルアクションやネットワークの構築のため、実践的な活動を行っています。

ONE TEAMでいちばん大切にしているのは、月に1回のアウトリーチ（家庭訪問）活動です。さまざまな生きづらさがあるこどもたち、家庭へ、「顔の見える関係」を基礎として、困ったときにSOSが出せる、出していいたいんだということを実感してもらえるよう、「ゆるく長くつながり続ける」がキーワードとなっています。

ONE TEAMでは、「こども」を年齢で区切ることはしていません。“こども期にこどもとして愛され、守られ、育まれ、学ぶことができたか？”という視点から、必要なサポートとケア、情報提供を個別に行っています。一人ひとりに沿った、いわばオーダーメイドな支援を行っているため、「ONE TEAMは、こんな活動をやっている団体です」とは、なかなか言えません。また、「ゆるく長く・・・」のなかで、出会った頃とニーズもどんどん変わっていきます。決して大きいことをしているとか、特殊な何かを行っているというわけではなく、私たちに会ってくれた“目の前のひとり”と時間をかけた対話を通じて、つながっていくスタイルです。

現在、ONE TEAMの代表理事を務める江口寛も、共生社会研究分野で机を並べた一人です。ONE TEAMの基本姿勢「自分の価値観を押し付けない」、「ジャッジしない」、「“正しさ”を求めない」を共有してくださるみなさまと、一人ひとりが尊厳あるライフコースを送れる社会を実現するために、一緒に考え・行動していけたら幸いです。

ONE TEAMの代表理事・大阪市立大学共生社会研究会理事 武輪敬心



写真説明：上段 知的障がいのある人へのメイクを通じたエンパワメント活動
下段 ランチを取りながらの理事会

機関誌再刊記念イベント、来年初頭に実施

このニュースレターの1面でもお伝えしたように、研究会では、機関誌「共生社会研究」を再刊する準備を進めています。すでに投稿論文の募集も開始しており、来春には再刊第1号を発行できる見込みです。研究雑誌の再刊を多くの方々に知っていただき、研究活動をさらに拡充していくため、再刊発行を記念したイベントを来年初頭に実施する予定です。詳細は現在検討中ですので、決まり次第、ウェブサイトやフェイスブックでお知らせする予定です。開催に向け、皆様のご支援、ご協力を切にお願いします。

大阪市立大学共生社会研究会 副会長・記念イベント実行委員長 田中逸郎

活動15年目に、NPO法人化

分野関係者が関わって立ち上げた「がんばろう！つばさネットワーク」

東日本大震災発生直後、大阪市立大学創造都市研究科都市共生社会研究分野のOB・OGおよび現役の院生が柏木宏先生を会長に結成し、2年3か月の活動を展開した、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会の活動から、当時、M1の院生であった私は大きな影響を受けました。会の活動に参加するとともに、2011年4月22日に柏木先生に立ち会っていただき、北摂つばさ高校の松野雅一PTA会長を代表に、教員有志、地域の関係者と共にごんばろう！つばさネットワークを立ち上げました。

実は大震災から約2週間後、3月24-30日の日程で中高生を引率して杉原千畝さんの学習としてNYのユダヤ系団体Anti Defamation League (ADL)と交流していました。そこでADLの幹部から、「君たちは大震災の被災地の支援はしないのか。杉原千畝さんなら行動しているはずだ」と叱咤激励されていたにもかかわらず、また、生徒の一部から「なんかしないとアカン」という声が上がっていたにもかかわらず、手がかりがなく、無為に日々を過ごしていたのです。

8期生の半田壺さんから誘われて参加した、4月8日の現地報告会で、4期生の坂口一美さん、阪野修さんの報告を聞きました。「高校生を連れて行ってもいいですか」と質問したところ、坂口さんから「大丈夫です。私がコーディネートします」という返事をもらい、「よし、これだ」と思って、翌日から尾崎先生から紹介されたロマンス観光にバスを発注し、団体結成と現地活動の準備を進めました。



以来、活動は15年目に入りました。運営においては、院生時代に学んだNPOの原則、特に、社会的課題を解決するために参加費、寄付、助成金を1/3ずつ集めて実行する、という原則を肝に銘じて、持続可能性を高めてきました。継続的な高校生による支援活動によって、学校と地域の関係は、敵対的な緊張関係から協力的な信頼関係に置き代わりました。支援活動が地域から評価されることで、高校生の自尊心が高まり学校も変容したといえます。茨木市内の関係者に言わせると、高校生による支援活動は北摂つばさ高校の質を良化する保険と認知されているため、活動継続の要望が高止まりしているのだ、とのこと。その要望に応えるべく、2025年6月14日、NPO結成、8月5日登記の運びとなりました。今後ともご指導ご鞭撻をお願いいたします。

都市共生社会研究分野8期生 藤井伸二

【活動実績】

気仙沼での現地ボランティア: 14回、延べ570名派遣、参加校は大阪府下10校

被災地から大阪への高校生招聘: 計10回、延べ293名招聘、参加は宮城県5校、大阪府下6校

街頭募金活動: 80回、延べ3,030名の高校生が参加、義援金計1,614,808円を気仙沼に届ける

国際連合研修: 2018年、気仙沼1名、大阪4名の高校生を国際連合NY本部に派遣

他の被災地への義援金支援と現地派遣: 熊本地震(343,243円)、鳥取地震(90,433円)

能登半島地震 現地派遣2回で高校生37名派遣 募金261,903円を送る

小学生と高校生のスポーツ交流: 2021年から5年連続実施

(数値は2011年4月22日から2025年6月14日のデータ)

【写真説明】

上段 ヤマヨ水産での牡蠣イカダのアンカーづくり(気仙沼大島 2023.7.15)

中段 NPOがんばろう！つばさネットワーク設立総会(茨木市 2025.6.14)

下段 気仙沼高、登米高の野球部を迎えた歓迎会

(北摂つばさ高校 2016.3.26)



〒558-8585

大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪公立大学

人権問題研究センター気付

大阪市立大学共生社会研究会

研究会のホームページ

2025年1月15日開設!!

以下のURLに、ぜひ一度
アクセスしてみてください!

<https://coexisting1.wixsite.com/academy>

シリーズ:「私の研究・活動」

インタビュー調査を通じて、心情の理解から気づきへ

企画担当の堅田利明です。2016年3月に都市共生社会分野を修了しました。修論は「障がいのある子どもを持つ親のセルフヘルプグループの機能ー父親と母親の協働・相互協力を中心にー」をテーマに、当時の勤務先でお会いしていた障害のある子どもの保護者支援活動から、父親・母親それぞれの心情、夫婦の協働や相互理解の実態を明らかにすることを目的にインタビュー調査によって夫婦の気持ちの一致とズレを考察しました。

在学中に転職し、研究職として吃音を伴って話す子どもの保護者・きょうだい支援を柱に現象学的解釈を基盤としたインタビュー調査研究を続けてきました。吃音は、「聞いたことはあるがよく知らない」という人が多いなかで、勝手な憶測や個人的逸話が広く伝播しており、誤った考え方や安易な助言によって本人や保護者家族が振り回されている実態が現在も続いています。本人や保護者の語りを通じてこれまでの暮らしの経緯、心情の変遷、そして、吃音の理解推進と啓発のために役立つヒントの数々が得られ、講演活動を通じて広めています。他者から理解されること、つまり他者理解のありようが自身へのまなざし、自己理解に大きく影響を与えます。子どもの自己理解を育てていくために周りの環境にいかに関与していくのかをテーマに実践活動を続けています。

堅田利明(かただ としあき)

11月の定例交流会

査読者と投稿者が学び合う査読をどう進めるか?

学術研究の進展には、研究成果を論文として整理、発表することが不可欠です。この論文の質を確保するために、大半の学会は、査読制度を導入しています。査読においては、査読者と投稿者の間で、建設的なフィードバックを通じた知的交流の機会の確保が強く期待されます。

とはいえ、査読の心得や手法などを学べる機会は、あまりありません。そして、査読における論文に対する考え方や重視すべき点は、しばしば個々の査読者に任されるため、投稿者が査読結果をどう反映したらよいのか、判断が難しい場合もあるようです。

査読者＝論文の欠陥を指摘する人、投稿者＝査読者から意見をもらう人という、上下関係的なイメージも存在します。しかし、論文の内容を最もよく熟知しているのは投稿者です。また、英語でPeer Reviewと呼ばれるように、Peerすなわち同輩、仲間によって行われる、論文の検討作業です。

したがって、査読者の役割は、投稿論文の掲載の可否を判断するだけではありません。第三者的な観点から論文から何が学べ、どのような意義を見出したのか投稿者に提示し、論文の内容を、同じ研究者として高めあい、その成果を社会に活かしていく必要があるのではないのでしょうか。

このような、査読者と投稿者の間で、建設的なフィードバックを通じた知的交流の機会の確保をどのように進めていけるのか。大学の教員や研究機関の研究者のみならず、共生社会の創造に向けた実践者の方々も交え、共に考え、査読という作業を担う一歩を踏み出してみませんか?

講師

柏木宏(大阪市立大学名誉教授・本研究会会長)

田中逸郎(NPO政策研究所 理事・研究員・本研究会副会長)

申し込み:締め切り 11月22日午後8時

<https://forms.gle/7r2B3Rc7hBjrvhzt6>

Coming Soon! 講演会・シンポ

今年4月に「反DEI時代における共生社会研究のあり方」というテーマでシンポジウムを開催して以来、研究会主催の講演会やシンポジウムが滞っていました。来年3月の年度末までに、3回を目標に開催する予定です。内容が決まり次第、WebsiteやFacebookでお知らせしますので、開催時には、ぜひご参加ください。なお、それぞれのURLは、以下の通りです。

*Website: <https://coexisting1.wixsite.com/academy>

*Facebook: <https://www.facebook.com/profile.php?id=100063635725650>

：編集後記： ニュースレターの発行にあたり、たくさんの共生社会研究分野修了生の会員から寄稿いただき、同窓のみならず近況ならびにご活躍を知ることができ、大変励みになります。本研究会も再始動からしばらくの月日が経ち、関係各位の尽力あって、ようやく機関誌発行に向けた準備も本格化してきました。定例交流会も毎回、会員非会員問わず多くの方にご参加いただき、盛会です。今後ともよろしくお願いいたします。(武輪敬心)